

# Un-Don-Kon and 6C, a gateway for successful research careers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/37760">http://hdl.handle.net/2297/37760</a>

## 成功の条件：運鈍根と6C

## Un-Don-Kon and 6C, a gateway for successful research careers

金沢大学医薬保健研究域医学系分子遺伝学  
(生化学第一)

村 松 正 道

3Cが大事や！と恩師・本庶佑教授がさる2月に行われた文化勲章受賞のお祝い会でスピーチされていた。3Cの話は、式典等のスピーチで恩師が好んで取り上げるトピックである。3Cとはサイエンティストに必要な資質としてのCuriosity, Challenge, Continuanceのことで、スピーチの時間によっては6Cに増殖することもある。Concentration, Confidence, Courageが加わるからである。

好奇心(Curiosity)を大切に勇気(Courage)を持って、大いなる難題に挑戦し(Challenge)、突破口を見つけたなら、自信(Confidence)を持って、全身全霊(Concentration)をもって、しかも諦めずに継続して(Continuation)難題解明に取り組む。これこそが凡人が独創的研究を成し遂げられる要素である、と恩師は力説している。中でも、好きな事を挑戦し続けること(curiosity, challenge, continuance)は、最も重要で、あれこれ悩んでいるなら、まずはここから始めたらいいのではないかと、との事。

恩師の恩師である早石修先生(大阪バイオサイエンス研究所名誉所長)は『運鈍根』と言われている。といっても直接その話を聞いた訳ではなく、恩師や先輩からの又聞きである。先生は研究者に大切な特質として『運鈍根』を以下のように述べられている。『私は運鈍根な研究者だった。良き友人や環境に恵まれたが(運)、カミソリのように切れる頭は無かった。むしろ鈍いほうだった。鈍いからこそ同じ事を愚鈍にも徹底的にやる事(鈍)ができた(根)。あまり賢いと直ぐに分かった気になるやろ?』

運や根性が必要な事は誰にでも分かるが、運と根に並べて鈍をもって来るあたりは、私から見れば神クラスの先生ならでは、と言わずにおれない。

この駄文を読まれている多くの先生方は、学生を指導する時、推薦書を書く時、自分自身のプロモーションの時などに、研究者の資質を考える機会が結構あるのではないかと、『ポジションは1つ、しかし候補者は2名、さてどちらを推薦するか?』あるいは、『これから応募書類を書くが、セールスポイントはどうするか?』等々。

近い将来、大成する若手研究者の一般特性が分かれば、入試の面接、教員選考、などの様々な選考の局面で多いに役立つであろう。もちろんその特性は、成功の定義によっても変わるだろうし、何年後に評価するかも結果は違ってくる。もっと興ざめする話としては、成功の定量化指標として論文のインパクトファクターや論文数を評価に使うかなどでももちろん違ってくるだろう。

新たな潮流をつくる研究や新しいコンセプトを生み出す研究などは多くのサイエンティストが目指す研究だろうし、その両方が達成されたなら、その研究者は成功し

たといっても大きなお叱りは無いと思われる。もちろん、研究のための軍資金や装備、マンパワー、人的ネットワークなどの研究に必要な現実的側面が心配ないなら、むしろ大成功していると言うべきだろう。

そのような成功した研究者には何か共通の特性があるのだろうか? またそのような研究者は、成功する前はどのような研究者だったのか? 何がその研究者を成功に導いたのか? もちろん、私の狭い見識から一般原則を抽出するのは無理である。そこで冒頭で上げた6Cや『運鈍根』に立ち返ってみると、両方合わせれば、これ以外の答えを探すのは難しい事に気づく。

平々凡々でトークが苦手な私からあえて6Cと『運鈍根』に付け加えたとしたら、Communication能力とCharisma性がある。外国人も含めた他の研究者との活発な討論は、その研究者を鍛え上げるし、また人的ネットワーク構築と情報収集に有利に働き、最終的にその研究者に大きな伸び代を与えるはずだ。2つ目のCharisma性は、特に人を惹き付ける特性が重要と思われる。これが身に付く秘訣があるのであれば、誰しも是非知りたところだろう。人を引きつける力は、マンパワー力の助けになるのは言うまでもない。昨今、研究の集大成である論文が高く評価されるには、テーマの事象を様々な角度から検証せねばならず、その時に一緒に研究してくれる戦友がいれば、いい仕事が早く仕上がるからである。

好きな事を挑戦し続ける。夢のような研究生活ではないか? そんな研究者が日本に大勢いたら、日本からもっとブレイクスルーがでること間違いなし。しかし残念ながら、多くの研究者にとって、『好きな事を挑戦し続ける』ことは難しい。なぜなら日々の研究費を獲得するために悪戦苦闘を強いられるからである。科研費の研究計画書の欄には必ず、重要性、意義、社会貢献、などを書かねばならないし、また業績は数値化される。自然現象に魅惑されて研究する事と、審査員が考える意義や重要性は、必ずしも相思相愛にはならない。『好きな事を挑戦し続ける』にはやっぱり『運鈍根』が必要だろうか? 好きな事が『運』よく科研費獲得に迎合する内容で、少々のストレスは物ともしないタフネスを兼ね備え(鈍)、一時的に好きな事が端に追いやられても、長い目で好きな事に執着できる性格(根)が必要という事か?

6Cや運鈍根はたいしてそろっておらず、好きなことを挑戦し続ける余裕もない私だが、近い将来そうなれる様、自分は何を重要と考え、何に魅惑されるかを忘れずに研究を続けたい。また学生さんには好きなことに挑戦できる環境をできるだけ提供できるよう努力したい。